

隨泉寺寺報

平成 22 年 (2010 年) 5 月号 第 477 号

TEL 082-892-0217 <http://www.zuisenji.com/>

浄土真宗本願寺派 高峯山隨泉寺

宗祖降誕会法座

講師 住職自修

講題 『いのちめぐまれて』

■宗祖降誕会 ～浄土真宗をしのぶ行事～ 《親鸞聖人のご誕生を祝って》

ともしびを、たかくかかげて、わがまえを、ゆく人のあり、さ夜なかの道

真っ暗な闇路を、行く手も知らず迷いさすらう者を、灯かりをともして前を歩いて下さる御方がある。その御方につき随って行くところに、間違いの無い道を、心強く進む事が出来るのです。

正しい先生・師匠がいるからこそ、私達は正しい生き方が出来ると言うものです。逆に、正しく生きるためには、何よりもまず、正しい先生・師匠に、正しい教え（仏教とは限らず、キリスト教でも）に巡り合う事です。

5月21日は親鸞聖人の御誕生日です。親鸞聖人はお釈迦様が説いてくださった膨大な教えの中から、すべての人々が、無条件で救われる道を見つけてくださいました。私がお念仏のみ教えにあえたのは親鸞聖人が伝えて下さったからです。

5月の法座予定

- 5月 9日 …………… 掃除 平原東
- 5月 14日 昼席午後1時より …………… 初参式（平成21年生まれ）
- 5月 14日 夜席午後7時より …………… 出張法座 なし
- 5月 15日 朝席午前10時より …………… 降誕会法座引き続き門信徒会総会 おとき
- 5月 15日 昼席午後1時より …………… 前住職聞思院釋不動法師三回忌法要
- 5月 23日 午後1時半より …………… 瀬野川婦人部役員会
- 6月 2日 午後6時より …………… 門信徒会本部役員会



門信徒会総会

門信徒会の総会を開催します。例年どおり5月15日の朝席後に開催いたします。去年の行事報告、決算や、今年一年の行事予定、予算を審議していただきます。今年は庫裏修復という大事業が控えています。皆さん出席してご意見をお聞かせください。

☆ 老院（前住職） 聞思院釋不動法師三回忌法要

老院（前住職）に私が住職継職するとき、今度はどう言う名前と呼んだらいいのかという問いに【老院】と呼んでほしいと答えました。その当時は65歳でしたから、まだまだ【老院】というイメージには程遠かったので【老院】という言葉が定着するまでには時間がかかりました。【老】という字はなんとなくイメージが悪くて、【老衰】とか【老害】【老醜】という言葉につながってマイナスの言葉に思えます。しかし【老】という言葉は実は物事の経験深くして、中心にいることを表す言葉でもあるのです。たとえば【老師】は先生を表しますし、【家老】とか【大老】【老中】は時代劇にもよく使われるようにその幕府、藩の中心的な役職を言います。

晩年はすっかり【老院さん】が定着して、まだまだ中心的な役割を していましたが、お浄土に帰るには少し早すぎたような気がします。皆さんもこれからその豊富な知識と経験を伝えてもらいたいと思っておられたでしょう。しかし住職としてはこの隨泉寺の為にできることは たし、社会的にも十分実績を残しました。何よりもゆるぎない【信心】を獲得していました。

親鸞聖人は、その弟子明法房の死を知ったとき、「ご往生、めでたく候」と手紙を遺子に当てて出されました。それはなすべきことをなし終えたということです。だから「めでたい」のです。明法房は、もと弁円という名の山伏で、親鸞聖人を殺そうとしたこともあった人です。

「お前は今こそなすべきことをなし終えたのである」という、お釈迦様の子《ラーフラ尊者》が悟りを得た日に釈尊が言われた言葉を思い起こします。なすべきことをなし終えることとしての死、めでたき死でありたいものですね。もちろん、自らは寂しく、残る者には悲しいに違いありませんが。

一昨年5月1日浄土往生した前住職（老院）の三回忌法要を5月15日宗祖降誕会法要の昼席で勤めます。皆さんお参りしてご焼香ください。

☆ 初参式

平成21年生まれの赤ちゃんの初参式（初参り）を行います。ご近所におられたら声をかけてください。みんなでお祝いしましょう。（ふだん着）でお参りください。

☆御礼

永代経懇志 金 拾萬円 馬場八重子殿 故 馬場一司様 特 永代経志として

☆御礼

門信徒会へ 金 一封 馬場八重子殿 故 馬場一司様 香典返しとして



5月

この如来 微塵世界に みちみちたまえり

『唯信砂文意』（註釈版聖典 709 頁）

榊原徳草氏に、『BodySattva Hase Every Where』（ボディーサットバズエブリフェア）という著述があります。あちらこちらにいらっしやる菩薩、という意味と考えています。

榊原氏は語られます。私たちは毎日食事をしますが、例えば、大根はどんどんと生長して、一番いいときに食べられます。もちろん、大根は人間に食べられるために生長しているではありません。肉も魚も同様です。また木々は、二酸化炭素を酸素に変えます。

私たちはその酸素を呼吸して命をつないでいますが、木々は酸素の料金を要求しません。榊原氏は、私たちの周りにあるこれらのものは菩薩であるといわれます。自分のことは後にして、まず人のために何かをする点をとらえて、菩薩といわれたと考えられます。

榊原氏の言葉から思いつくことですが、大根などのおかげで生命を維持できるだけでなく、私たちが今、念仏者であれ、学者であれ、サラリーマンであれ、それぞれの姿でここにいることは、多くの菩薩のはたらきがあったからと思われます。

親鸞聖人は、この角度から「この如来 微塵世界に みちみちたまえり」といわれます。

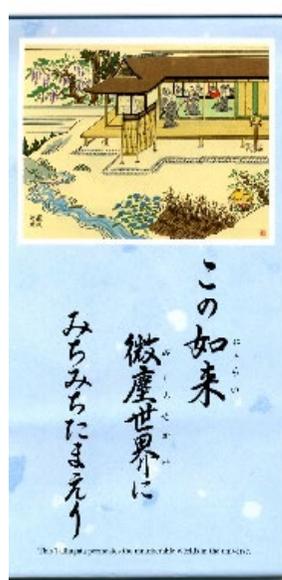
あるお坊さんは、寺に生まれたけれども、僧侶になりたいとは思いませんでした。就職を考えましたが、うまくいかなかったので、仏教の勉強をはじめたそうです。

元々、勉強したかったわけではありませんから、今ひとつ、力が入りません。こんないい加減な生活でいいのかと考えているときに、「それでいい」と先輩からいわれたそうです。いい加減なままでいいとはどういうことなんだろうと思ひ、そのあたりから勉強もしはじめたそうです。そのあとも紆余曲折はあったようですが、お坊さんとして過ごされています。

今から思うと、先輩の言葉だけではなく、先生、知人、家族が、嫌がられてもいってくれた言葉から何の気なしの一言、さらには範となる生き方などを して、さまざまに私を導いてくださったと、その方はいわれます。

微塵世界に如来がみちみちておられるとは、このようなことと味わえます。その一方で、微塵世界というのはあらゆるところですから、私にも、仏がいらっしやることになります。

考えてみますと、煩悩に満ちた私が、今の私をつくるさまざまなお縁に気づくとは考えられません。もし気づくとすれば、私に至りとどいた仏が気づかせてくれたように思われます。その仏のはたらきがあるからこそ、私が仏への道を歩ませただけだと受けとられます。



☆ ありがとうございます。この思いは尽きません

父 植野 健治は平成 22 年 2 月 18 日、78 年の生涯を閉じました。3 年前に病の告知を受けながらも、自らの人生を最後まで前向きに、力強く生き抜きました。

寂しがり屋で、賑やかな席が好きだった父。家族や親 くに囲まれて、皆で騒いでいる時の父は本当に嬉しそうでした。

絆を大事にしてきた父だからこそ、皆との交流を大切に思っていたのだと思います。今頃は、お浄土から「寂しがっていないで元気を出して！」と言ってくれているような気がしております。

いつも優しく、陽だまりのような安らぎを家族に与えてくれる父でした。一人娘の私のことも、温かく見守りながら育ててくれました。

定年まで家族のために懸命に働いてくれた後はグランドゴルフを趣味とし、毎日のようにお友達と出かけていました。趣味のお仲間に出会い、素敵な晩年を送れたことは父にとってなによりであったと思います。毎日を充実させ、皆様の温かいご厚情に支えられた父はとても幸せであったと思います。父に代わりまして、生前のご厚誼に心より感謝申し上げます。

釋浄健 植野 健治 平成 22 年 2 月 18 日 行年 78 歳

長女 重田 麻由美

合掌



☆ 今日を生きる

明日のために今日があるわけではありません。老後のために青春があるのではなく、大人になるために子どもがいるわけではないのです。

そしてまた、少年が老け込んだのが老人なのではありません。若すぎる老人が少年なのではありません。

それぞれが初めての今日、最後の今日、私の今日を生きているのでしょうか。かけがえのない今日を生きるのです。悔いることのない、輝ける今日でありたいですね。

今日を明日の手段にしてはなりません。今日そのものが、尊く、かけがえのないいのちの時なのです。

今日を昨日の残り物にしてはなりません。新しい今日なのです。昨日はどうあろうと、今日その昨日をどう受けとめ、どう生かすかが今日の宿題なのです。

昔の人は「無常は同い年」だと言いました。いのちの世界は、誰もが同級生だったのです。